

# ウェールズの昔話研究と国立歴史博物館

美濃部 京子

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

## Folklore Studies in Wales and the National History Museum

美濃部 京子

文化政策学部国際文化学科

Kyoko MINOBE

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

ウェールズはイギリスの一地域でありながら、隣接するイングランドとは異なる文化的特徴を持っている。現在ではネイティブの話者は20%近くにまで落ち込んでいるが、ケルト系のウェールズ語が話され、アングロサクソン系のイングランドとは異なる文化を現在にまで伝えている。

ウェールズの首都カーディフの郊外セント・ファガズにある国立歴史博物館は、ウェールズの伝統的な人々の暮らしを後世に伝えるために様々な取り組みを行っている。ひとつは歴史的な建物から、伝統的な暮らしにかかわる道具や日用品、民芸品などの収集・整理・展示、そしてもうひとつはウェールズの失われつつある伝統文化をフィールドワークによって調査することである。そうして集められた民俗資料はアーカイブに整理・保存されている。

本稿では国立歴史博物館のコレクションおよびアーカイブの資料について触れながら、博物館がウェールズの民俗学、昔話研究に果たした役割について紹介する。

Wales is a peninsular part of the Great Britain, which sticks out westward into the Irish Sea, bordering England on the east. Welsh people have a Celtic origin and have a unique culture different from that of the English. Since its language is also quite different from English, the language itself may be an obstacle to study Welsh culture.

St Fagans National History Museum has been playing an important role in Welsh folklore studies since its foundation in 1948. Its collection includes historical buildings and such materials as agricultural tools, domestic utensils and costumes, musical instruments, folk crafts, various kinds of manuscripts, and books. The museum also has concentrated on field work around Wales and accumulated a huge amount of materials such as audio-visual recordings, films, photographs, and manuscripts, most of which are invaluable records of the old Welsh daily life that died out years ago. The museum has four kinds of archives to store and organize these collections from its field work: sound archives, manuscript archives, film archives and photographic archives.

The sound archives include material relating to Welsh oral tradition such as folk narratives, linguistics, folk songs, and folk beliefs. Robin Gwyndaf, a member of the museum staff, has recorded most of the folk tale materials in the sound archives. The Welsh folktales are divided mainly into three categories: magic and the belief in the supernatural, history and tradition, and humour.

St Fagans National History Museum indeed has unique characteristics and plays an important role in preserving traditional Welsh culture.

### 1. はじめに

このたび、ウェールズ大学との交流協定に当たって、学部長特別研究費によりウェールズを訪れる機会を得た。イギリスの口承文芸を研究しながら、ウェールズについては、その言語の特殊性もあり、今までなかなか手が出せないでいたが、これを機会にウェールズの口承文芸についても詳しく知りたいと思うようになった。

ウェールズは、イギリスのグレート・ブリテン島の西部に位置する地域で、16世紀にイングランドに統合され、連合王国の一地域になっているが、民族的にも言語的にも隣接するイングランドとは全く違った特徴を持っている。イングランドでは、5世紀ごろに大陸から渡ってきたゲルマン系のアングロ・サクソン人の系統をひいて英語が話されているが、ウェールズは紀元前3世紀ごろに渡って

きたケルト系のブリトン人の系統をひき、ケルト語の一派であるウェールズ語が話されている。

18世紀ごろまでは、ウェールズのほぼ全域でウェールズ語が話されていたというが、その後、産業革命にともない、ウェールズに鉱山や工場で働くために労働者がイギリスのほかの地域から押し寄せ、ウェールズ語は英語に主要言語の座を明け渡した。その後、20世紀になって、英語によるラジオ・テレビ放送、映画などが広がり、英語の影響力はますます強いものになっていった。そして、20世紀末までにはウェールズにおけるウェールズ語を話す人たちの割合は20%以下にまで落ち込んだと言われている。

ウェールズでウェールズ語を話す人たちの割合が20%以下であると言っても、それは首都カーディフを中心に、イングランドに隣接する東部の人口が集中する地域に英語を話

す人が多くいるため、北部、西部の方では今でも半分以上の人がウェールズ語を話していると言われており、ウェールズの言語や文化を守ろうとする取り組みも広く行われている。

今回はその中でもウェールズの国立博物館 (the National Museum of Wales) のひとつである国立歴史博物館 (St Fagans National History Museum) を中心に、ウェールズの文化を守る取り組みと昔話研究への貢献について述べることにする。

## 2. ウェールズ国立歴史博物館

ウェールズ国立歴史博物館は、カーディフ郊外のセント・ファガンズに1948年にオープンした。開設当時はウェールズ民俗博物館 (Welsh Folk Museum) と呼ばれていたが、その後、1998年(?)にウェールズ生活博物館 (Museum of Welsh Life) と名称が変わり、2006年に歴史博物館に変わって、現在に至っている。英語名称の方はこのように2度変えられているが、ウェールズ語の名称は開館以来ずっとウェールズ民俗博物館 (Amgueddfa Werin Cymru) で変わっていないという。一般的には所在地の名前をとって「セント・ファガンズ (St Fagans)」と呼ばれることが多い。

博物館の最大の特色は屋外展示で、ウェールズ各地から様々な建物が集められ、敷地内に再建されている。その数は40以上にのぼり、先史時代のケルトの村や木の柱の輪 (timber circle) を再現したものから、中世、近代の農家、商家の家屋や学校、郵便局まで、当時のウェールズの人々の実際の生活が再現されている。また、農場には生きた家畜が飼育されており、農作業の実演なども毎日行われている。室内展示の方は、衣服や農機具などの生活用品やラブ・スプーンなどの民芸品、楽器などこちらも人々の日々の暮らしを伝えるものが多く展示されている。また、博物館の敷地内では聖デービッドの日や五月祭、ハロウィーンなどの祝日やウェールズの伝統的な結婚式などの催し、子ども向けの体験イベントなど、実際に伝統的なウェールズの暮らしを体験できるような催しも定期的に行われ

ている。

博物館では、こうした公に展示されたもの以外にも多くのコレクションを集めている。歴史博物館では特に中世から現代に至るウェールズの人々の毎日の暮らしを記録、保存するため、主に7つの部門で資料を収集、整理し、調査、研究を行っている。すなわち、

1. 歴史的建造物
2. 集団生活に関するコレクション
3. 家庭、および衣類のコレクション
4. 農業、工芸、交通に関するコレクション
5. 文化的生活に関するコレクション
6. 各種アーカイブ (資料保管所)
7. 図書館

である。

1の歴史的建造物については、博物館の敷地内に移された40余りの建物のほか、建てられた場所にそのまま立っている二つの建物がある。建物だけでなく、室内の装飾品などの付属品も一緒に集められている。

2の集団生活に含まれるものは、商売や取引に関する品物で、金物屋や雑貨屋、その他の店の品物、あるいは、医学、法律、教会などに関する品物である。

3の家庭、衣類に関するコレクションは多岐にわたるが、室内の内装品や家具、流行の服から普段着、制服、職業にまつわる服装、アクセサリ、調理器具、酪農用品、家庭用品、食器、装飾品、家庭用布地などを含む。なかでも、時計や農家の家具、19世紀、20世紀の女性の服のコレクションを豊富に持っている。

4では、18世紀末から20世紀半ばの農業用の道具や乗り物、機械を広く集め、どれもウェールズの製造業に深くかかわるものである。工芸のコレクションは工業化途上のウェールズの田舎の労働生活を表すものであるが、木工や皮細工、金属加工品のほか、籠作りや製粉、焼き物、その他の田舎の仕事を表している。繊維関係の工芸品では、キルトや刺繍、レース作り、仕立て、織り機、毛織物などがある。

5の文化的生活に含まれるものは、音楽や言い伝え、習慣、文化、教育、社会施設、民衆文化、スポーツ、子どものおもちゃやゲームなどである。

6の各種アーカイブは、フィルムアーカイブ、手稿アーカイブ、写真アーカイブ、音声アーカイブの4つの分野がある。なかでも、視聴覚アーカイブにはおよそ11,000の録音資料があり、そのうち9000は博物館のフィールド調査による記録である。記録された口承の資料は民間説話、言語学、民間医療、伝統音楽、民間伝承と習慣、オーラル・ヒストリーなどがある。また470本のフィルムコレクションは博物館のスタッフによる歴史的な記録である。手稿アーカイブは33,000以上の文書からなり、ウェールズの民俗学に関するものである。それに加えて、250,000の写真があり、過去、現在の暮らしを写真で記録している。それぞれのアーカイブには専門のスタッフがあり、ひとつの資料について、何種類かのインデックスが作られ、カードの形でファイルされている(写真)。たとえば、昔話や伝説の資料については、それぞれの内容にしたがって分類するほか、被調査者(インフォーマント)別のカードも作られ、名前、出身地、住所、生年月日、職業、両親・祖父母の出身地、調査時の状況などについて記入し、ファイルされている。

7の図書館では、40,000冊以上の書籍と200タイトル以上の民俗学研究に関する雑誌を揃えている。おもに博物館のコレクションやウェールズの社会・文化史に関する学術的出版物については、特に参照できるようになっている。

博物館では、このようにさまざまなコレクションを収集・保存するだけでなく、独自の研究プロジェクトを立ち上げ、研究・調査が進められている。

### 3. 博物館のフィールド調査

博物館による口頭伝承のフィールド調査が始まったのは1957年のことである。当時失われつつあったウェールズの民俗、特にウェールズ語の方言の保存が緊急の課題であったという。博物館は1960年にウェールズ南東部のグラモーガン州(Glamorgan)でエヴァン・ビーバン(Evan Bevan)の調査を行っているが、その記録が今では忘れられてしまったその地域の伝承の貴重な証言であ

ると同時に、エヴァンはその地域で生まれながらにウェールズ語を話す最後の話者のひとりでもあった。

博物館のフィールド調査の最初の主なスタッフはヴィンセント・フィリップス(Vincent Phillips)であるが、口頭伝承に関して、伝承や人々の生活、昔の記憶などを聞き集めた。当時は電気の通っていない村もあり、車に自家製発電機を乗せて、ウェールズ各地を回ったという。やがて、彼の目的はウェールズの人々の生活のあらゆる要素を記録することになり、フィールド調査のインタビューだけでなく、公刊された音声資料や文書、写真なども利用した。また、民謡(フォークソング)の収集を始めたのもヴィンセント・フィリップスだった。おもに年配の人々に子どもの頃の歌を聞いて回り、できるだけ古い歌を完全な形で残そうとした。そうした歌い手のほとんどは人前で歌ったことがなかったような人たちだったが、そうして集められた資料がウェールズの民謡研究に大きく貢献している。

フィリップスの後を受けて、1963年から民謡調査に加わったのがデイヴィッド・ロイ・セイアー(David Roy Saer)である。ウェールズ各地で、歌だけでなく、歌い手がその歌を最初どのように聞いたかも合わせて記録し、民謡の歴史を研究するようになった。現在はウェールズの民俗音楽の専門家として多くの著作を出しており、2000年にはウェールズ民謡学会(Welsh Folk Song Society)の会長に選出された。

散文による民間説話のフィールド調査を担当したのが、ロビン・グインダフ(Robin Gwyndaf)である。1964年に博物館のスタッフに加わって以来40年以上にわたって、ウェールズの民間伝承の収集に携わった。3000人以上を調査し、そのうちおよそ450がテープに収められており、長さにするとおよそ700時間になる。内容のほとんどは昔話、民間伝承、民間信仰に関わるもので、およそ20000項目に亘る。グインダフは2008年に博物館を退官したが、現在はウェールズ語と英語で本を執筆中だそうで、40年以上にわたる調査の成果をまとめるとともに、ウェールズの昔話をあらゆる面から

包括的に概観するものになるだろう。

#### 4. 博物館のアーカイブ

上でも述べたように、博物館のアーカイブでは4種類の資料を扱っている。

中でもメインは音声アーカイブで、ほとんどがウェールズ語によるものである。主に地方の方言、伝統的な生活様式が姿を消しそうな地域のインフォーマントから録音したものが多いためであるが、英語による記録もかなり含まれている。古いものはオープン・リールのオーディオテープに記録されているが、新しいものはDVDが使われている。

もうひとつ音声アーカイブで特筆すべきなのはウェールズ民謡学会の主要メンバーであったレディー・ルース・ハーバート・ルイス(Lady Ruth Herbert Lewis)が1910年から1913年にかけてカーディガン州(Cardigan)で記録した民謡など音楽に関する資料である。それらはエジソンが1877年に発明した蓄音機の筒に録音されていた。1969年、ルースの娘であるキティー・イドウォル・ジョーンズ(Kitty Idwal Jones)が博物館に寄贈したものである。当時それらの蠟性の筒に記録された音声は再生不可能だと見られていたが、最新技術のおかげで、最近になってそのかなりの部分が再生され、12のトラックがCDに移されている。

音声アーカイブではこの蓄音機の筒のほか、9000以上のフィールドでの記録、BBCが記録したテープやディスク、1000以上の市販のディスクを保管している。

フィルムアーカイブはおよそ50時間の16mmフィルムを所有しているが、その多くは1970年代に急速に消えつつあった伝統的な生活様式を収めたもので、伝統的な農業技術や調理、工芸などが収められている。またテレビ局との共同で作られたフィルムもある。1960年代のクリスマスの行事であるマリ・ルイド(Mari Lwyd)やウェールズのジブシーの木靴踊りフウェル・ウッド(Hywel Wood)の映像、ウェールズ語による最初のトーキー映画なども貴重な資料の一部である。

手稿アーカイブに納められているのは、農家の日記や職人の帳簿、年季奉公の契約書、家

畜の管理簿、入札の手紙、学校の練習帳、在庫一覧表、ウェールズの音楽祭アイステズボドの歌、調査報告、バラッドなどの歌などである。その他1930年代に国立博物館が行ったウェールズの民俗文化に関するアンケートへの回答やウェールズ大学が行った農業語彙に関するアンケートの回答も所蔵している。

中でも最も重要な情報源になっているのが1960年代に博物館の口頭伝承および方言部門がウェールズのある分野の専門知識を持つ人達に送った「回答集(Answer Books)」である。ここには昔ながらの農業のやり方、市、薬やその他の習慣、娯楽、伝統的食事、工芸、方言やことわざ、19世紀末以降のウェールズの田舎の生活の記憶などが含まれている。

写真アーカイブにはおよそ150000のネガとプリント、15000のスライドが保管されている。博物館が開設された1948年以降に撮りためられたウェールズの人々の暮らしの写真が当時のまま、あるいは複製された形で残されている。こうした写真は研究者や出版社、新聞、雑誌などに利用されている。

#### 5. ウェールズの昔話

ウェールズの民間説話として一番知られているのは11世紀から13世紀にかけて作られた『マビノギオン(Mabinogion)』であるが、それ以降華々しい魔法昔話や昔の神々の話、英雄の話や数々語るような職業的な語り手は現れなかった。しかし、ウェールズにおいて語りの伝統は今でも生き続けており、現在の生活を映すような笑い話や短い逸話などに重きが置かれている。

ウェールズの昔話は3つのおもなカテゴリーに分類される。ひとつ目は魔法昔話および超自然的なものに対する信仰である。魔法昔話は現在では少なくなりましたが、そこには中世のマビノギオンの時代に特徴的だった魅力的な魔法の雰囲気をも今も伝えるものであると言う。主人公に望みの物を与える魔法の指輪や、浦島太郎のようにこの世とは時間の流れの違う世界訪問について語るものなどはその一例である。ウェールズでは長い国際話

型の魔法昔話は今ではほとんどなくなってしまったが、短い地方伝説の中に、超自然的なものに対する信仰が数多くみられる。

二つ目は歴史的伝承である。中世の語り手や詩人は歴史や伝承、民族の系譜などを伝える役割を担っていたが、ウェールズにおいてもペンケルズ (pencerdd) と呼ばれる王侯貴族に仕える詩人がいた。こうした詩人たちが伝えていた物語 (伝説) が今にも伝わっている。そのおもなものとしては、アーサー王やマーリンなどの昔の (偽) 歴史的人物についての話、国民的英雄オウエン・グリンドゥル (Owain Glyndŵr) や海賊バルティ・デュー (Bartí Ddu) などの実在のウェールズの有名人についての話、よく知られた地方の人物についての話、地方の歴史的出来事についての話、地名や洞窟、泉、湖、橋などにまつわる話がある。

三つ目がユーモアを交えた話である。これは大きく4つにわけることができる。ひとつ目はほかの国にも似たような類話が見られるもので、型にはまった登場人物が出てくる笑い話である。これはウェールズ全域でよく知られている。二つ目は南ウェールズの炭坑夫や北ウェールズの石切り工などある特定の社会的集団の関心などを反映した話。三つ目は実在の地方の人物にまつわる話として語られるこっけいな話。4つ目は身近な人に起こったこっけいな話で、体験実話や伝聞実話に近い話である。橋の上で寝ていたら川に落ちてしまったなどという他愛もない話も多いが、聞いた人がそれをまた他の人に伝えることで伝承として広がっていく話である。

こうした話が、家庭内や村の中での伝承、仕事仲間の中での伝承、農繁期などに集まってきた季節労働者の中での伝承、地方の祭りや集まりなどの場における伝承、旅人や家畜の遊牧を行っていた人たちが伝える伝承、旅館や酒場での伝承によって、その姿を変えながら現在に伝わって残っている。残念ながら、現在では公の場で語る職業的な語り手はほとんど姿を消してしまい、伝承を伝える人たちも調査者が聞き出すことでようやく話す機会を持ったという人たちが多いようである。

博物館のウェブサイトには9人の語り手たちが語る30余りの話が音声ファイルとともに

に収められているが、そこには国際的に類話を持つ魔法昔話、地方伝説、超自然的な話 (死の予兆、妖精や悪魔との取引など)、形式譚、子どものための話、笑い話、ウェールズの歴史や社会の生活の変化などを反映した話や伝承がみられる。これらの語り手も皆職業的な語り手ではなく、調査で訪れるまで人前で語った経験のなかった人も多かったと言う。しかし、このフィールド調査によって、忘れ去られようとしていた前世紀からの伝承を蘇らせ、後世に残すことが可能になった。

日本では『マビノギオン』については近年いくつかの翻訳も出版され、知られるようになってきているが、それ以外の現在に伝わる伝承については『ジブシー民話集』(J・サンブソン編) ぐらいしか紹介されていない。グインダフの『ウェールズの昔話』(Welsh Folk Tales) も一部は日本語に訳されているようであるが、まだまとまった形での翻訳紹介はないようである。今後、ウェールズの伝承について研究を進めるとともに、少しずつでも日本にその伝承について紹介できるように及ばずながら力を尽くせたらと考えている。

## 6. おわりに

この報告をまとめるにあたっては、平成20年・21年度の文化政策学部長特別研究費をいただき、2008年8月に現地を訪れる機会を得た。ウェールズ国立歴史博物館では、音声アーカイブの副資料管理担当者 (assistant archivist) であるロウリ・ジェンキンス (Lowri Jenkins) さんに博物館のアーカイブ内を案内していただき、実際の目録も見せていただいた。また、ほんの短い時間であったが、ロビン・グインダフ教授とも会うことができた。部屋の昔話のインデクスカードがファイルされたキャビネットの前で「私のライフワークです (My life work)」とうれしそうに話しておられた姿が今でも目に浮かぶ。また、ウェールズ大学トリニティ・カレッジのルイズ・サイモン (Louise Saimon) さんには、博物館を訪れるにあたって、アポイントメントの電話連絡をしていただいた。あらためてお礼を申し上げたい。



音声アーカイブ。昔話のインフォーマント索引



Robin Gwyndaf 教授と Lowri Jenkins さん



テーマごとに分類してインデクスされたカード



民俗風習について絵と説明をつけてカードにしている



資料には個別の番号がつけられ、番号順にファイリングされている



写真はカードに貼られ、説明をつけて並べられている

参考文献

- Gwyndaf, Robin. *Welsh Folk Tales*, National Museum of Wales, 1999.
- . *Welsh Folk Culture: Publications* [2008] 著作目録
- . "Welsh Folk Tales "[1985?] 講演での話を翻字したもの
- Mabinogion*. 『マビノギオン ウェールズ中世英雄譚』シャーロット・ゲスト英訳 北村太郎邦訳 王国社 1988
- 『マビノギオン 中世ウェールズ幻想物語集』中野節子訳 JURA, 2000 .
- Owen, Elias. *Welsh Folk-Lore*.1887. [Rep. Dodo Press, n.d.]
- St Fagans: National History Museum. " St Fagans; National History Museum " <http://www.museumwales.ac.uk/en/stfagans/> (公式ウェブサイト)
- Sikes, Wirt. *British Goblins: Welsh Folk Lore, Fairy Mythology, Legends and Traditions*. Boston: James R. Osgood, 1881. [Rep.Kessinger, n.d.]
- Simpson, J. 『ジブシー民話集 ウェールズ地方』庄司麻水訳 社会思想社 1991。
- Trevelyan, Marie. *Folk-Lore and Folk-Stories of Wales*. London, 1909.[Rep. EP Publishing, 1973]





